願行上人憲静の研究（下）

伊藤宏見

心慧智海は嘉元四年（徳治改元）（一三〇六）四月廿一日に置文（覚園寺修造事）を認めた。これには宝篋印塔婆が先ず第一にのっているので、生前に計画が出来ていたらしい。開山智海塔は正慶元年（一三三二）仲秋廿八日造立の塔よりおくれることわずかに仲冬廿七日に造立されている。心慧は嘉元四年四月十七日に示寂した。智海小比丘は文永十年三月八日には「金剛界私見聞」を薬師護摩堂西寮で写しているので、このころすでに、これが覚園寺の前身であるとすれば、この寺に因縁浅からざる人物であったのである。智海が覚園寺の開山として正式に入寺するのはそれより二十二年をへだてたのちのことである。そしてその後三十五年ほど経て正慶のころ開山塔が立つということになる。

ここでもう一つ覚園寺と願行との伝説を語るものがある。現在覚園寺には、願行ゆかりの仏像が二つあるが、今愛染堂にある鉄不動（県文）は試み不動といって、願行が胡桃谷のタタラバで大山寺不動の試作をしたのが、この像といわれている。鉄不動であるところから、願行の雄壮な人柄をしのばせるのでおもしろい。タタラバ附近には、大楽寺跡があり、この寺の開山は願行流の公珍であるといわれ、よく願行の開山とまちがえられる。寺は永享の騒乱の頃、覚園寺下に難をさけて移ったが、幕末に衰微して、愛染堂は覚園寺にひきとられ、現在覚園寺の本堂の如きになっている。大楽寺旧趾は今も覚園寺々地近くにのこっている。しかし人の入れぬ荒薮と化している。現在覚園寺には、廃寺（願行開山）の旧理智光寺の仏像鞘阿弥陀があり、又同寺の開山像と推定される願行上人像がある。今の覚園寺愛染堂のうら手に小堂ながら地蔵堂がある。この地蔵は快慶様の立像であって重文指定をうけている。この地蔵は俗に黒地蔵と古くからいわれているご

とく、鎌倉時代から道俗の信仰をあつめている由緒あるものである。足利持氏の生活を追憶気味に叙した「鎌倉年中行事」には、正月二十四日はこの黒地蔵に詣ずることが定められている。

六道能化の地蔵菩薩は地獄でくるしむ罪人たちが業火にくるしむのを見るにしのびず、自ら獄卒の代理をつとめ火を焚き、罪人の苦しみをのがれさせてやったという有難い地蔵が覚園寺の黒地蔵だという伝説を生むようになった。しかしこの伝説はそう古くはないかもしれない。地蔵の全身は金箔もなく、黒くなっているというところから、民衆というものは生活の退屈さから、かかる伝説をうみだすもので、彼らには生活をうるほす知恵があるものである。この地蔵の信仰は鎌倉時代にさかのぼる歴とした記録がある。無住法師の「沙石集」第二巻下には、願行上人とこの黒地蔵との霊験をつたえているからである。このことはあまりにも有名である。

「律苑僧宝伝」には「海浜有二一堂一。中奉地蔵菩薩像。師欲レ移之於二二階堂一。恨役夫不レ足。忽有二偉貌僧一。白レ師曰。吾能致レ之。須臾盡運。師感喜。欲レ謝二其僧。俄失所在一。始知菩薩之霊応也。」とある。要するに、鎌倉の海辺にお堂が一宇あって、中に地蔵菩薩がまつってあった。これを二階堂（あるいは永福寺のこと、このころまだ覚園寺はない。）へ運びたかったが、何せ人足がたりないので、上人一人ではもちあがらない。そうこうしているうちに、一人の頑丈そうな立派な風貌の僧が現われて、たちまち運んでくれた。上人はよろこんでお礼をいおうとすると、姿は消えてなかった。そこでこの僧こそ地蔵の霊がかりにすがたをあらわしたのだと知った。

霊験あらたかな地蔵さまだと思っていると、どうも好相がよくないので、仏師に命じて顔を改作したく思った。仏師がいうには、この像は甚だ霊験あらたかなので、我らどもには、みだりに改作することはできないという。ところがその晩仏師のゆめまくらに一人の僧があらわれて、こういった。おまえの惟うところはさまたげないから、上人のいう通りにつくってみよといわれるので、夢の中で地蔵の顔を改作したという。頼朝の霊を慰めんがために願行は由井ケ浜での念仏会を開いたことといい、この度の地蔵の霊験といい、地蔵即願行という人格の反影を通して思わしめられるようである。このような霊達の人であったから、北条時宗、貞時は上人の

力によって大いに救われたのである。相模太郎といわれた時宗も思いのほか若死をしている。北条氏の政権抗争にもちいた血なまぐさい手段や策謀をかえりみると、己れの血すじにおののきを感じていたのであろう。泰時は明恵上人の感化があった。時頼も短命でおえた。経時は二十三才。時頼三十七才。長時三十六才。時宗三十七才。これをみても威武にも無常感はいろ濃かったものと推定を余儀なくする。

「律苑僧宝伝」には副元帥時宗平公。欽二師徳義一。崇敬尤厚。」とまでいっている。時宗の子息、貞時は重病にかかり、「百計医弗効」とまでなってしまった時、願行上人に救を求めた。願行が加持することによって貞時は平癒してしまった。この恩に報いるために東寺の復興ということになるとのべている。この辺のところは願行と北条家すじとの、東寺復興にからんだプロットではないかとも思われるが、上下おしなべて仏教時代のことである。北条氏の名徳を優遇する例はよくみるが、それだけ関東の文化に自信がなかったのであろう。北条氏の中から頼助の如き法将があらわれるのはまことにめずらしいことである。そして願行と頼助は北条氏の信仰の面で大いに支えとなっていたことは想像にかたくない。そして願行の東寺復興事業に対して、「平公忻然唯諾」とのちに書かれるのは、時宗は関東人らしく、歯切れのいい返事をしたと見える。そこで願行は東寺に行って宝菩提院に住んで事業の監督にあたったのであるらしい。そこを「律苑僧宝伝」では、「師乃至二東寺一。寓二止宝提院一。鳩レ工経営。平公捐レ貲以相二其役一。未レ幾殿堂楼閣宝塔之属。皆一一就レ緒。崇広厳麗。視レ昔有レ加。」とかいている。何事も実力者たるものはかくあるべきもので、又関東人は気が短いから、することもすばしこかったのであったのであろう。たちまち東寺の寺観は旧に復したものと見える。そしてこれが願行の今貴ばれる所以ともなっているのである。

永仁二年（一二九四）三月、関東地方を歩いた無住法師の「沙石集」に、願行の地蔵霊験譚がのり、願行はすでに上人として、いずれの書物にも敬われるようになった。彼はかなり有名な僧として一般にしれわたっていたのである。

北条氏のてこ入れで、東寺の寺観がすっかり往時の美をとりもどしたこの年、佐々目の僧正（法印）とうたわれた、北条時宗の甥の頼助は、かって東寺の長者(注)に補されていたが、更に東大寺の一一二代目の別当に補された。

（注）東寺長者歴代「読史備要」には頼助の名はみえない。「東寺長者次第」にある。正応元年正月六日に長者を辞している。これは東寺復興の永仁元年より五年ほど前である。

永仁三年四月十七日、願行は京都西八条の住坊大通寺に示寂したといいつたえられている。大通寺は先にものべた通り、万祥山遍照心律院といい、ここは源実朝の妻八条禅尼の寺といってよく、今に実朝の像をまつり、開山を真空廻心としている。即ち実朝の妻は藤原氏であったが、夫の死後、源氏の旧館である西八条に戻り、実朝の菩提を悼うために真空を戒師として尼になったのである。大通寺にはもう一つ女の歴史がある。国文学史に名高い阿仏尼の墓があるのである。阿仏尼は定家の子為家の妻で、実は継室であった。為相、為守の母になったが、嫡子為氏と為相の訴訟のために鎌倉に出て決着をつけようとしたことは「十六日夜日記」で有名である。彼女も実朝と同じく歌人であり、実朝は定家に師事していたのであるから、八条禅尼とは縁故をたどれば不自然ではない。阿仏尼は建治三年十月十六日に京を出て関東に向っている。弘安三年頃この「十六日夜日記」は成立したとみられているので彼女の生存年代は不明なのでよくわからないが、願行時代に大通寺に来たものかどうか、憶測をする以外にはない。定説では阿仏尼は鎌倉で死んだとなっているが明確な資料はないのではないかと思う。阿仏尼の子息冷泉為相の墓は鎌倉浄光明寺裏山にあり史蹟となっている。またその母たる阿仏尼の墓は英勝寺内にある。京都の墓は分骨したものか、供養塔であろうか、今定かではないが、小さな五輪塔は京都地方で産出すると思われるざら目の黄御影石で、著者の石造美術の知識からしても鎌倉期までさかのぼるものと思われる。阿仏尼は北林阿仏尼といわれ、寺域が荒廃した頃、江戸の寛延二年（一七四九）になって、土地の有志が、五輪塔をいいつたえによって草莽の地より発見して、円柱の碑をたて、追善法要を営んだことを示している。阿仏尼の塔とこの碑のみ現在地の大通寺境内に運んである。この銘文によると「維此墳墓　祇園北林　真性所帰」とあるから、阿仏尼の墓塔であると信じられているのである。銘文中、「既四百六十七年、尊裔冷泉右ヱ門督為村卿」云々とあるのでこの頃まで子孫が生存していたものと思われ、追善が営まれ、墓を修理しているのである。さて阿仏尼がいつ没したかについては、寛延二年から四百六十七年をさかのぼれば判明することで、冷

泉家の家伝があって、かかる数字が具体的に明記されていることは見逃すわけにはいかないのであろう。さすれば阿仏尼は弘安五年頃なくなっていることになる。願行に先立つこと彼女は十二年前に世を去っている。開山真空におくれること十四年であった。弘安四年初から五年にかけては目下の資料のゆるす範囲では、願行は京都におり、例の五重大塔の心柱が弘安四年には建つのである。しかしいつごろ、願行は大通寺と関係が出来たのかはわからないが、真空とは相識であったろうし、又八条禅尼とも面識があったものと思われる。大通寺は真言宗東寺派に属している。但しはなはだ残念なことに旧地をはなれてしまったことである。しかし法燈が今日まで及んでいることは幸としなければならない。

鎌倉由井ケ浜（今名越）の安養院蔵の願行木坐像の胎内銘には、建治二年八月廿日未剋住生　春秋八十二と願行の没年があるが、この説はとらない。

かくて願行は生前の徳行により、朝廷より宗燈律師の勅諡を賜った。満八十才の生涯を閉じたのであった。

付法の弟子に、道照（智海）、覚阿、憲淳、宥祥があり、これらの弟子たちは鎌倉末期に活躍する人々で、鎌倉仏教史に欠くことのできない業績をのこしている。さらに授法の人々は数百人あったといわれているなかに、性慧、審海、剣阿があり、「血脈類集記」には、智憲が「願行上人資」とあるから弟子であり、正縁は「一髻文殊」奥書によればやはり弟子であり、金沢文庫保管の「不動灌頂」の「相承次第」によれば、憲静―真尊―了禅―剣阿―□空　文永六年己巳□月廿八日」となっているから、真尊も嫡流であったろう。更には「求聞持大事」一巻一帖には「已上願上人授真尊上人大事也」「正和三年十二月十七日於宀一山授秀範阿闍梨　円海」とあるによっても証明されうる。

また、願行と同門、即ち意教上人の附法には実融證道上人があり、願行と気脈を通じて活躍した模様である。実融証道は金剛三昧院の長老に補され、実融方の祖といわれる。願行と同じく東寺の再興の大願主でもあった。

願行方付法の四天王の一人、伊豆方の祖である宥祥についてはここでは省略するとしても、彼は嘉元三年（一三〇五）即ち師の願行示寂して十年目の年に、願行のはじめた理智光寺に平帥の招きで「大日経疏」を講釈している。この時宥祥に随従したのが、のちに善通寺方の宥範である。宥祥の弟子に

は、慈猛、頼然、源暹、道照、寂静などがある。尚宥祥の周辺については、拙著「印融法印の研究」（二一五～六頁）を参照されたい。

願行の弟子の憲淳（一二五八～一三〇八）は三宝院流の方面でも戒律の願行に師事しただけあっていろいろな仕事をしている。憲淳は後宇多法皇の師匠であったので、のちに法皇の力によって東寺の密教興隆をみたのである。大覚寺蔵の国宝の「御遺告」をはじめ、「弘法大師伝」、「東寺興隆条々事」、「施入状」（神護寺）はみな国宝に指定されている。法皇をしてかくも弘法大師の密教に入信せしめたものには、憲淳の力があったが、「本朝高僧伝」には、憲淳は「小野之豪也。伝二密於後宇多上皇一。故上皇常言。願行之法孫也。」とある。法皇がみずから、願行上人の法孫であると常にいっていたということは、願行の徳を慕い、かつその法流を承けたことをほこりにしていたのである。願行の影響はかくて見逃すわけにはいかない。憲淳は徳治三年八月二十三日に寂すといわれ、寿五十一、著作に嘉元三年撰の「続門葉和歌集」十巻がある。「事密抄」は密教大辞典にはないが、筆者蔵本にその第四巻があり、見返しに「此記者憲淳僧正記也。一見後書写之了」とある。これは全巻あれば尨大なものである。憲淳の研究は他稿にゆずるとしても彼は国師僧正といわれるほど後宇多帝に信任された。出身は粟田口一品良教の子である。はじめ報恩院覚雅に入室し、正応五年八月具支灌頂、乾元元年二月二十六日、遍智院聖雲法親王に印可を禀けている。徳治三年四月十四日、後宇多院に伝法灌頂を授け奉って、附法状は同廿六日に授けた。憲淳は同年八月二十三日に示寂しているから、死期を察知してのことであったろう。憲淳の法をつぐものは、他に永仁五年の釈迦院隆勝を正嫡としている。

憲淳もその師の覚雅も関東に来ているので、願行をたよったものではないかと思われる。醍醐寺文書には、「法印覚雅附法状」があって、「正応五年八月十四日、於関東二階堂、愚臥病中、宗大事、大法、秘法悉憲淳阿闍梨ニ授了。門人不審ヲ不可成。為予門徒者可貴〃〃覚雅法印（花押）」とあり、二階堂は永福寺のことで、覚雅は病臥中憲淳に付法して、法相続をなしとげたのであるが、しかもこれが関東であったので、如何に当時の鎌倉は密教が盛んであったかがわかる。又憲淳は覚園寺をたてた北条貞時ともかかわりがあり、彼の為に関東

で修法をしている。これもかげに願行がいたからである。

醍醐寺文書記録聖教目録二十（神奈川県史資料編古代・中世2巻二六八頁）には、五大虚空蔵「白明抄二」の奥書があり、本そのものは応永廿三年の転写であろうと思うが、次の如くある。

御記云正安二年七月令水本法印清書了。去永仁二年九月関東為客星御祈勤修此護摩開白。聊有瑞相。仍後朝申子細之処。北条貞時庶大守御霊夢之由、有御感之恩礼。雖顧不得之陋質、猶御相承之法力、依法不依人。可仰、可信者歟。法印憲（憲淳）

これは弟子の隆勝に清書させたものであるが、憲淳は永仁二年関東の二階堂あたりで、北条貞時の為に修法（北斗法か）をした。その時のことをかき加えているのでこの記録には興味がある。祈祷中憲淳に瑞相があると、はたせるかな貞時にも霊夢があったことを告げている。憲淳は、自分は陋質なので、とても恩礼などうけとるほどではないが、自分が、願行や覚雅から相承した法力によってかかる功験をえることができたのだと思い、これは法に依って人力のせいではないとのべている。憲淳の言葉は謙虚である。この年の永仁二年はさきにものべた通り、執権貞時の東寺への莫大な援助によって、諸堂伽藍及び築墻等の功を終えて、旧観に復した翌年であるので、弟子憲淳が関東におり、願行は東寺宝菩提院か大通寺辺にいたものと想像されうる。

憲淳に関してはその他の文書記録はあるが、先ず鎌倉に隆勝をつれてきていることは以上で証明できるが、直接願行との関係を示した資料がなく、印信血脈類に待つのみであるのは残念である。

覚園寺月課年課記（応永十三年六月廿五日　住持悦岩思咲書）には、毎月十七日には、宗燈和尚忌として理趣三昧を行い、又朴思思淳書誥によれば、四月十七日には、宗燈忌を行い、大夜半齊、諷経齊了理趣三昧の行事をおこたりなくつとめていたようである。

さて鎌倉における願行遺跡として、理智光寺、大楽寺については新編鎌倉誌巻之二、鎌倉攬勝考巻五にある。

又安養院についても新編鎌倉誌巻之七にある。更には同書には覚園寺地蔵についても語られている。

新編相模国風土記稿巻之五十八愛甲郡巻之五には、半原村

の項があり、塩川滝及び清滝寺は願行の遺跡と考えられる。ここは近くの八菅山の修験道との関連があり、八菅山寺は、応永二十六年の勧進帳によれば、行基の開山で、八本八手の玉幡が降り、八本の菅根が忽然出生したので八菅山寺といい、貞享四年に聖護院末となったが、正応四年九月七日記銘の長八尺巾一尺五寸余の碑伝には金剛仏子阿闍梨長喜云々とあり、金剛仏子阿闍梨良慶は賓頭盧尊者の胎内銘に「奉造立賓頭盧尊像右志者為大伽藍安穏興隆仏法、別天長地久、御願円満、関東将軍家尊氏朝臣、並武蔵守師直、同三河守云々」と書しているので元弘の変以降の北朝方の支援をえて、大伽藍と仏法興隆をはかったものと思われる。賓頭尊者は律院の食堂に祠られるもので、東密系の律院であったと思われる。

先年この山中の経塚より、平安末から、鎌倉初期とおもわれる、愛染明王その他の遺品がみつかっている。尚山には源頼朝寄進の大日堂があった。尊氏、持氏の援助は大きい。

現在麓の墓地は神葬であるが四十九院の塔婆をかこう様式をとどめている。八菅山は八木八手の玉幡が天から降ったといわれ、二二五米の丘陵であるが、山の神厳さは往古の感をとどめている。この山に連なる法華山、経ケ岳、華厳山、法論堂などは巡峯の要所といわれている。

尚半原村からはもっとも聳えてみえるのがみどりの仏果山である。これらは中古より如何に仏教が浸透したかをものがたる自然風地である。

相州古文書第一巻には「旧浜之郷村　鶴嶺八幡別当勝福寺縁起」があり、寺は長承二年八月十二日に草創されたといい、旦那は大庭三郎三代先良正也であるという。本尊阿弥陀三尊は高麗仏だという。「関東律寺之最初」といっている。頼朝によって再興され、建久二年文覚上人の舎弟の思允が中興としている。しかし文覚の舎弟としては思允は年代があわぬのではないか。「元弘三年綸旨成、其後武州金井原合戦為願、武州小机鳥山寄進、文治三年矢下毛娯国発来、日本国中浦々有御祈祷」云々とあって、誤字多く粗笨の文とそしりをまぬがれえぬ文書であるが、「其後当寺前住願行上人、東寺為大勧進、勅定下向、同為別当□□□□□□坊出来」とある。筆者は勝福寺三世で「弘安三年八月十二日　正悟記之」とあるが、勿論後世のあまり教養のない僧侶によって誇大に筆記されたものであるが、中に「関東律寺之最初」といい、思允とか「悦上人」とか前住願行上人の名が出てくるのは何かしら

の往古の事実をのべているのであろう。「悦上人」とは応永のころ覚園寺で活躍した思咲悦岩であろうか。さするとこの寺は思允や願行や悦岩らのかかわった寺で、北京律の人の一つの拠点であったのであろう。尚今勝福寺は常光院という名に江戸時代は変っている。また「鶴嶺八幡佐塚両社縁起」というものがあるが内容は「鶴嶺別当勝福寺縁起」と大同小異であるので紹介をはぶく。この地は茅ケ崎の地であるので、大山、日向、東海道では、小田原、箱根への要路であるので、又鎌倉へいたる一歩手前の地でもある、願行等も力こぶを入れた寺であったろう。頼朝が上洛の途次、ここに止宿しており、大庭平太景能の居住地でもある。願行遺跡として一考を要するところである。

（昭和五十一年九月三日清書）

願行上人年譜

西暦	才	年月日	事行
一二一五		建保三年	出生（月輪年表）
一二三九	24才	延応二年二月十五日	「聖如意輪観自在菩薩念誦次第」を書写す。（県史、金沢文庫）
一二五二	37才	建長四年四月廿二日	佐々目遺身院坊において、守海より重受。（血脈類集記）
		四月　日	泉涌寺開山不可棄法師（俊芿）請来律疏の開版の勧進比丘となる。（「行事鈔」上一奥書、「行宗記」四下奥書「資持記」上一下奥書等）
一二六一	46才	弘長元年	灌頂を定証より受く。（血脈類集記）
一二六四	49才	弘長四年（文永改元）	二月廿一日　「一髻文殊」を経師ケ谷において法印御房の伝持本を書写す。（県史、金沢文庫）
		三月二日	鎌倉観音寺において、「四種護摩記」をうつす。「県史、金沢文庫）
一二六四	49才	文永元年	この頃意教上人頼賢に従って東関に赴くといわれている。
一二六五	50才	文永二年　五月六日	法花山寺上人御本を以って、「伝法灌頂三昧耶戒作法」写す。（金沢文庫）
		五月廿三日	同法を面受し畢る。

一二六六	51才	文永三年	意教上人の命により、鶴岡八幡宮寺の築墻を作す。（「伝燈広録」続）
一二六九	54才	文永六年正月廿一日	覚阿に平等心院（槙尾）において伝法灌頂を授く。（「高野春秋」）
一二七〇	55才	文永七年四月廿九日	東寺五重大塔焼失。
一二七二	56才	文永九年七月一六日	願行、慈猛と共に三宝院流を意教上人より受く。（「鶏足寺譜」「真言宗年表」）
一二七四	58才		常州阿弥陀山（不軽山）に念仏会結集。鎌倉稲瀬川のほとりで、説法念仏会を三七日間行う。（「本朝高僧伝」「律苑僧宝伝」）
一二七五	59才	文永建治の交	性慧に両部灌頂秘印を小野旧儀にて授ける（賢静とある。）。（県史、金沢文庫）
一二七六	60才	建治二年五月廿五日	密教大辞第六巻の小野流付法相承系譜には、「意教上人―願行上人―賢静―覚阿―」とある。
一二七八	63才	弘安元年四月十九日	中納言具房卿に「以二対馬島一為二料所一東寺五重塔の再建をはかる。朝儀なれども「正税依レ無レ実」により、願行関東へ下向を命ぜられ、大勧進となる。
		十月二日	法花山寺上人よりの所伝を称名寺審海大徳に授了。（「伝法灌頂三昧耶戒作法」奥書）
一二七九	64才	弘安二年四月廿四日	西院「伝法秘記」を覚園寺開山智海に伝授書写を許す。「道照坊（心恵）私見日記、如此被申、乃記之、乍二伝受願―上人一道照房口伝云云」とある。（県史、金沢文庫）
		八月四日	湛叡（審海か。この時湛叡は文永八年生れ故、八才である。）に具支灌頂を授く。（月輪附載一―一記）
		八月廿日	寅刻東寺五重塔事始。北条時宗上人を東寺大勧進として諸国棟別、淀関所米をもって再建事業にあてる。（東宝記）
一二八一	66才	弘安四年　正月八日	「灌理鈔」四冊（金剛界）によれば、「賜東寺上人之秘本所書留也。但依御進発未校可得其之者也審海」とあるので、この頃願行は京都東寺に向う。東寺の塔心柱立つ（東宝記）。
			「西院伝法秘説二重三重」等を劔阿に書写を許す。
一二八三	68才	弘安六年四月廿四日	「二間観音様後七日灌頂大事」一帖、「西口訣」を劔阿に書写を許す。
		五月廿一日	

一二八五　70才　弘安八年十二月十七日　東寺造塔畢る（東宝記）。

一二八六　71才　弘安九年三月二十八日　相州大山寺に曼荼羅供行われる。「舞楽曼荼羅供私記大山」一巻一帖。劔阿の私記によると、「右作法者弘安九年三月二十八日、被供相模国大山寺私記也。今作法依御流式、真言院憲静上人相談光氏等日記、今作法就之。被遂彼山供養之間、為当流故実写留之者也。

一二八七　72才　弘安十年　正安二年八月二日、於相州鎌倉赤橋辺越州禅閣之亭、挑残燈兮降筆了、金剛末資劔阿俗才二十（花押）。（県史、金沢文庫）

一二九〇　75才　正応三年　五月十日　泉涌寺第六世となる。入院瑞世（「法語」、「南山北義集」、「月輪附載一の二記」）別受授戒。（泉涌寺執行別授戒軌則。西大寺泉涌寺奥書）このころ、宮中に召さる。伏見帝に授戒。恩賞により、高野山東塔修理。結縁灌頂式復活をねがう。（「律苑僧宝伝」、「本朝高僧伝」）

十月十八日　東寺塔落成す。（高野春秋）

十二月　「長承元年灌頂記」を二階堂において宗覚本もって写す。「及深更馳筆了求法沙門憲静」とある。

一二九三　78才　永仁元年　灌頂院（東寺）の曼荼羅を新しく描く。東寺諸堂四面筑墻等の功を終え、最勝寺入道崇演（貞時）、建久の佳例にしたがって、鷺服十万疋を奉加する（東宝記）。

一二九四　79才　永仁二年二月　無住法師「沙石集」第二巻下に願行上人、覚園寺蔵の地蔵菩薩の霊験を載す。

一二九五　80才　永仁三年四月十七日　京都西八条の住坊大通寺（遍照心律院）に示寂（「東宝記」、「常楽記」、「続群書類従」「万花鏡」）。宗燈律師と勅諡を賜う。

付記。鎌倉安養院の願行上人像胎内銘に「鎌倉由井浜安養院開山願行上人、建治二年八月廿八日、未剋往生。春秋八十二」とあり、本像は永正十五年大仏師下野弘円法橋の作であるが、この願行入寂年紀は採らない。

願行上人の肖像

願行の肖像として、つたえられているものが僅ながらある。

一、木像としては鎌倉覚園寺蔵像高七四・〇〇cm、坐高五〇・二cm膝奥三四・五cm、寄木造玉眼嵌入、彩漆あり、室町中頃の製作年代という。（山田泰弘氏調査）「鎌倉」二十二号）昭和四十九年六月一日発行、鎌倉文化研究会。

願行上人坐像　大山寺

一、願行上人坐像　胎内銘によれば、

願行上人作　不動明王画

名越安養院願行上人像胎内（背部）銘

「鎌倉由井浜安養院開山願行上人　建治二年八月廿八日

末尅往生春秋八十二」

光明遍照　十方世界

念仏衆生　摂取不捨

南無阿弥陀仏

天下和順　日月清明

風雨以時　災厲不起

今願主第十五代住持泉蓮社昌誉上人（花押）

仏師　下野弘円法橋

人主　百六代勝仁天皇御宇

永正十五年戊寅　十二月吉日

一、大山寺蔵木坐像

願行の作品

願行が自からつくった不動明王像

一、覚園寺蔵不動明王像（鉄）県文化財

一、大山寺蔵不動三尊像（鉄）重文

願行上人作　鉄不動三尊　大山寺

一、他に川崎市麻生、不動堂に鉄の不動像があり住持の話によると願行作といいつたえられていると。

一、画像としては永仁年間の東寺蔵の両界曼荼羅がある。「東宝記」第二には「仍去永仁年中、願行房憲静為二大勧進一新致二図絵一令懸二潅頂院一本曼荼羅令レ安二置宝蔵一云々とあること

一、又画像としては現在するものに高野山霊宝館保管の不動明王像三幅がある。絹本彩色である。

その他記録にあるものとして、鎌倉扇ケ谷浄光明寺蔵

一、願行上人作愛染像壱躯（新編鎌倉志巻三四）（旧華蔵院本尊）

一、薬師像（大楽寺、新編鎌倉誌記載）

一、清滝寺　本尊不動明王。

新編相模国風土記稿巻之五十八

愛甲郡巻之五半原村の項

清滝寺今大山不動院と号す。真言宗古義鎌倉郡手広青蓮寺末　本尊不動願行作長三尺開山は良弁なりと云う、寛文五年に記したる、縁起に天正初北条氏直の臣内藤左馬頭行次堂宇を修補し祈願所とせしと云。

願行試みの不動

とある。先年実地調査で今一切ない。明治初年住持が女狂の為にせ金をつくり発覚、とらわれ、寺廃絶するというあしき伝説を土地にきく。清滝寺は神社の別当もかね、祭礼にも収入あり富頗多しときく。以下この寺の所在は修験の行場であったと思われるので、願行上人の開山と考えていいのではないか。——

一、相州古文書第二巻　旧供僧等覚院所蔵文書二九七に快季寄進状案（一ノ三〇四）がある。

蓮花定院

当院大師奉寄附本尊己下□

一、三宝院聖教先師（快寺）所持本皮子□

（中略）

一、願行筆　不動一鋪

（中略）

是皆愚僧多年依所請。不盛□□

仍奉寄附大師也

文安六年六月廿七日

一、鎌倉攬勝考巻十一附録によれば、金沢の竜華寺には寺宝、八祖画像がって「弘法大師筆又は願行上人筆ともいう」とある。

これは未目である。又八祖画像でよいものは大井金子の最明寺蔵に注目したい。

願行上人遺品資料

新編鎌倉誌巻之四によれば浄光明寺には

一、二十五条袈裟　壱頂　願行上人の受持なりとある。現

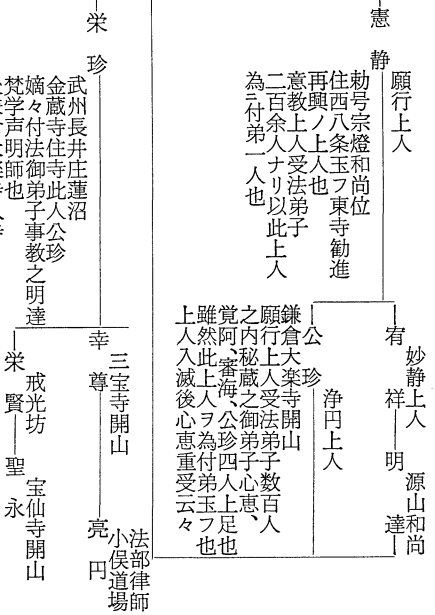
存かどうか不明。

一、新編相模国風土記稿巻之五十一、村里部、大住郡巻之十には、大山寺什物としてその内に

「鈴杵、一口（中興開山願行所持と云、下二品同）五鈷杵一箇、柄香炉二柄」

とあり、他品と共に図柄を記載している。

他に参照として「三宝寺誌」（東京都練馬区上石神井一丁目、亀頂山三宝寺、小峰頼典発行昭和三十五年十一月十八日）には、三宝寺血脈があり。



願行上人憲静の研究（下）

三宝寺は「応永元年に権大僧都法印幸尊創一宇」と寺伝にいわれている。応永五年三月九日入滅、二世亮円は、応永三十五年正月二十三日に入寂している。

明治二十八年七月七日に当寺住職が製した「建物什宝取調書控」によると

○仏舎利　在塔中、塔丈六尺五寸、三青黄白也。

伝曰鎌倉大楽寺二代栄珍ヨリ三宝寺開基幸尊応永年中法流相伝之当時附属貴重随一、古来相承矣。

とあるのは願行相承のものであろうか。更に

○五鈷　純金　壱箇

伝曰鎌倉大楽寺二代栄珍ヨリ開基幸尊応永年中法流相伝ノ当時附属伝来宝器随一之重品也

とある。これも願行上人のものか。

願行関係の寺

○安養院は名越の入口、海道の北にあり。祇園山と号す。浄土宗知恩院の末寺なり。此寺初め律宗にて開山願行上人なり。其十五世昌誉和尚と云より、浄土宗となる。昌誉より前

住の牌は皆律僧なり。初長谷の前、稲取川の辺に在りしを、相模入道滅亡の後、此に移すと云伝ふ。本堂に阿弥陀坐像、客殿にも阿弥陀の坐像を安ず。共に安阿弥陀が作なり。寺領一貫六百文あり。（以下畧）

（新編鎌倉誌巻之七より）

○理智光寺は五峰山理智光寺と号す。土籠の東南なり。太平記には理致光院とあり。本尊は阿弥陀、作者不知。腹中に名仏を蔵むる故に、俗是を鞘阿弥陀と云ふ。開山は願行。牌に当寺開山勅諡宗燈憲静宗師とあり。願行の牌なりと云ふ。又大塔の牌あり。没故兵部卿親王尊霊と有。裡に建武二年七月廿三日とあり。此牌は浄光明寺慈恩院に有しを、理智光寺にあるべき物也とて、慈恩院より当寺へ移し置也。大塔宮石塔山の上にあり。

○鑪場（クヽラバ）西の方にあり。願行、大山不動を鋳たる所也と云ふ。

按ずるに、此所胡桃山大楽寺旧跡に近し。

理智光寺の図

（新編鎌倉誌巻之二）

○東光寺旧跡は大塔宮土籠の前の畠也。医王山と号す。開山未考。「鎌倉大日記」に建武二年七月二十三日、兵部卿宮直義が為に東光寺に於て生害せられるとあり。また理致光院の長老葬礼の事を営むとあり、則ち此所なり。（同書）

○覚園寺地蔵、鶴岡頼印僧正行状、至徳二年三月二十七日、佐々木近江守基清を使として、頼印僧正に被仰云、二階堂地蔵菩薩は義堂和尚造進する所なり。建長寺前住佳椿庭和尚、雖被供養、存する仔細あるに因て、重て開眼供養の義をのべらるべしとあり。此の地蔵堂建立の時奇事多し。「沙石集」に見へたり。

「沙石集」には丈六の地蔵とあり。鎌倉の浜に有しを東大寺の願行上人、二階堂へ移すと云へり。

筆者注「東大寺は東寺の誤り」

（同書）

○大楽寺は胡桃山千秋大楽寺と号す。覚園寺の門を入左方に有。律宗也。開山は公珍和尚、本尊は鉄不動、願行作。是を試の不動と云ふ。大山の不動を鋳時、先試に鋳たる像と云ふ。

愛染運慶作。薬師 願行作。此寺昔は胡桃谷（クルミガヤツ）にありしが、後爰に移す。胡桃谷條下に詳也。

○胡桃谷（附大楽寺旧跡）胡桃谷は浄妙寺の東の谷也。大楽寺の舊跡あり。昔薬師堂有り。今亡びて礎石のみあり。本尊は今大楽寺にあり。「大日記」に永享元年二月十一日、永安寺炎、類火に依て大楽寺焼失すとあり。此所永安寺へ近ければ、永享の比まで爰に有しとみへたり。（同書）

○理智光寺

五峯山と号す。永福寺廃跡より東、古へは此辺も大倉と号しけり。往昔、貞永元年十二月廿七日、後藤大夫判官基綱、故右府実朝追薦の奉為（ヲンタメ）に大倉に一寺建立の功をなせり。供養導師は弁僧正鶴岡大別当定豪と云々。夫より後に至り、理智光寺と称し願行を開山とし、禅律にて、京都泉涌寺の末也。開山願行の牌に開山勅諡宗燈憲静宗師と有。仏壇に大塔宮の牌あり。寺伝に云、浄光明寺の慈恩院に有しか、是は当寺に有べきものとて、爰へ移せしといへり。本尊阿弥陀作不知、腹籠りに霊仏を納しゆへに、土人是を鞘阿弥陀と唱ふ。此寺今は尼寺と成山内東慶寺の末となれり。

○鑪場（タヽラバ）、西の方にあり。是は大楽寺の本尊、鉄不動を鎔工せし所といふ。

○覚園寺黒地蔵「沙石集」に見へ、初鎌倉の浜に有しを願行上人二階堂へ移すともいえり。

（鎌倉攬勝考巻五）

○鎌倉胡桃谷大楽寺住持願行、当山に参詣して山中房舎等、都て荒廃せしを見、再興の志願を発し江島弁財天に祈て金を得て本尊を鋳造し、且殿堂門廡に至る迄造営して旧に復す、故に願行を中興開山とす【大山不動霊験記】曰、釈願行諱憲静、初随西京泉涌寺俊芿国師剃髪、後住大通泉涌雨刹、既復行相州鎌倉胡桃谷、大楽寺、然登同州大山寺、熟視山形跨大住・余綾・愛甲三郡、周回一百余里、山有七面形如鳥瑟、象明王体、秀発擢衆嶽、溪澗幽邃泉石清冷、往時殿宇、大都朽廃、啻余基趾、鐘梵声断、溪流潺々、幢節影没、山雲漠々、逕路就荒、蟋蟀囂耳、房舎無人、狐兎交迹、独徘徊峯巒巌谷、実海内絶勝、天地隩区、観観開創之盛典、憤激発再興志願、瞻先香写所作之明王宝躬、即小像而不愜所志、新鋳大像、専欲利済、於是乎入江島龍穴、持誦七日、祈天女、欲得像金、漸過三七日、天女現形、自持閻浮檀金一寸八分者一塊、以授願行、行白天女言、我所欲鋳者大像也、今所賜金小分難成大、願応所志、俯蒙恵賜、天女曰今所授雖小分、用之作即満足子望、必莫疑慮、言了、天女入宮、行得之、歓喜踊躍、深謝天女直帰鎌倉、速造鋳範以所得金、分為三分、以其一分、先試作不動像、見今在胡桃山大楽寺、為本尊、次復以二分紫磨金、鋳大像成矣、安置此於大山、営構伽藍、脩造房舎、続断興廃、故為大山寺中興祖也、其所鋳大像之

炉鞴今見在子鎌倉、永仁三乙未四月十七日、示寂

（新編相模国風土記稿巻之五十一）

寺格帳下　大日本仏教全書

○大通寺　京六孫王社大通寺

律宗真言三論兼学　　遍照心院

社領

高百石外神事領現米百石

右住職、塔頭之内一藤器量を撰、一山推挙之上相定ル

（以下省略）

○大山寺

御朱印　　大山八大坊

高百石

碩学料五拾七石

右住職、高野門首無量寿院ゟ申付ル

参考文献

一、年表日本史提要　山川出版社

一、新編相模国風土記稿　雄山閣

一、丹沢―その自然と山歩き―　神奈川県東京営林局監修（昭和三十六年）全国林業改良普及協会

一、文化財見学の手引　神奈川県文化財協会（昭和三十二年）

一、血脈類集記　真言宗全書

一、鎌倉攬勝考　雄山閣

一、新編鎌倉誌　雄山閣

一、金沢文庫古文書目録

一、神奈川県史資料編古代中世(1)、(2)

一、寺格表　大日本仏教全書

東宝記　大日本仏教全書

高野春秋　大日本仏教全書

大山縁起　大日本仏教全書

律苑僧宝伝巻第十三　大日本仏教全書

本朝高僧伝巻六十一　大日本仏教全書

「鎌倉」四号　川勝氏稿
二十二号　山田氏稿
覚園寺の肖像彫刻

鎌倉年中行事　古写本（著者蔵）

書道全集（鎌倉Ⅱ）　平凡社刊

密教大辞典　法蔵館刊
望月仏教大辞典
印融法印の研究上下　伊藤宏見著
鎌倉仏教の成立の研究　俊芿律師　石田充之編
相州古文書　貫直人編　角川書店
三宝寺誌　小峰頼典（昭和三十五年）
読史備要
「願行上人の東寺修造」　土宣覚了
密宗学報　第一五四号
「源遅方の法流とその行法について」　岡部光伸
密教学研究　第七号
日本仏教家人名辞典
東寺長者次第
相中留恩記略　有隣堂発行
その他、風土記記載の「大山不動霊験記」
八菅山―修験の里―　横井考作
かがみ第十七号　大東急記念文庫
昭和四七年三月

聖教印信類（写本を含む）

血脈類は史料としてあつかわれるが聖教の内容は一般性はなく未灌頂の人に示しうるものでないし、又師伝を経なければならぬのでここでは考証を控え、ただ聖教の伝存について示しておくこととす。高野山宝寿院宝蔵には憲淳付嘱の一派聖教が具備しているときく。

流布本としては、

「願行意教一坐行法撮要」快全口説―宥信記
鼎竜暁刊　明治十五年八月、最近では岡部光伸氏　昭和四十五年八月　印布本がある。

一、願行意教印決　全十巻　写本　岩城薬王寺隠老
八茎山純瑜記之

奥書　印決十巻糸玉集記之惣三宝院流々口決別当流諸口決等抜書之正為補当流之廃亡兼可為余流之助縁歟干時天正五年丁丑九月廿一日書之了
八茎山之隠老純瑜　生年五十七　夏臘三十九

転写次第

権僧正頼勢法印執事与法印頼尊

房州以清澄寺正本宥淳法印元禄四年林鐘上旬書写畢

常州南円寺第十八世之住以宥淳法印之御本

元禄五壬申孟夏中三日再校了

根来山報恩寺第三代住龍誉房遍阿

一、三宝院意教方　願行相承伝授目録

安政五戊午九月　受者心雄

（外題に）外に三宝院玄海相承目□之幷余三方

伝授大阿バザラ栄秀

一、（三宝院意教寄託本）願行相承　三宝院意教―證道相承　伝授目六

天保十三壬寅七月廿二日於真別処之―願行相承許可

受者得勇　蓮花寺

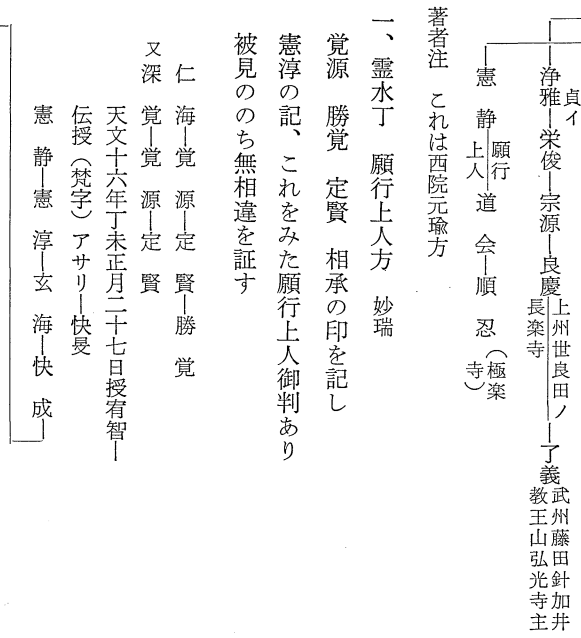
伝授阿闍梨耶隆映

一、願行方印信（真別所寄託）（存在目下なし）

一、伝燈広録巻下ノ巻五

伝法嗣祖流派分之十

成州小野随心院開祖増俊伝



著者注　これは西院元瑜方

一、霊水丁　願行上人方　妙瑞

覚源　勝覚　定賢　相承の印を記し

憲淳の記、これをみた願行上人御判あり

被見ののち無相違を証す

仁　海―覚　源―定　賢―勝　覚

又深　覚―覚　源―定　賢

天文十六年丁未正月二十七日授宥智―

伝授（梵字）アサリ―快旻

憲　静―憲　淳―玄　海―快　成―

又 弘治二年三月四月書之
　　権大僧都宥智
永禄六年壬十二月廿八日　於南院
　　奉受写之　　頼道
「三宝院座主相承三大事」には
応永廿一年卯月十日　総院家御本写之
同時遍智院御口伝給御本令校合畢
享保廿乙卯年三月廿八日　書写之金剛峯寺
沙門妙瑞」とある（断片的なもの）
一、願行方　印可（二）血脈
　　印可
授与　金剛観宝
印事　水土印
明　三部　総摂
水　種子　ロイ
　　巳上
文政十年丁亥十月二十日
伝授大阿闍梨　體仁（花押）
　　印可

授与　金剛知仙
印事　水土印
明　三部　総摂
水　種子　ロイ
文政十一年戊子十一月廿七日
伝授大阿闍梨　體仁（花押）

大日―成尊―┬範俊―良都
　　└義範―勝覚―定海―元海―
実運―勝賢―成賢―頼賢―憲静（高野山宝性院）―公珍（大楽寺）―栄珍（かまくら同寺）―
幸尊（石神井三宝寺開山）―亮円（同寺）―亮誉（同寺）―亮助（同寺）―亮誓（同寺）―定宥（同寺）―尊海―
賢珍―賢秀―頼融―俊誉―快宥―俊賀―頼慶―
宥鑁―定昌―範宥―長智―日宥―┬日盛（同寺）―智好（同寺）
　　└道空（五智山）―智好（智積院）―動潮（同院）―高俊（塩飽）―快澄（高野山谷上慈光院）―體仁―観宝

一、願行方印決　別写本
　　奥書
願行方印訣　純瑜記

以上十九通傳受分畢

（裏書）印決十巻糸玉集記レ之惣三宝院流之口決別当流心文口決等抜三書之一正為レ補二当流之廃亡一兼可レ為二餘流之助縁一者歟

干時天正五丁丑年九月廿一日書レ之了

八峯山之隠老純瑜　生年五十七　夏施三十九

（ここまでは一緒ですが、次に又、奥書がつづく）

干時延寶六戊午年二月入佛涅槃日敬白斯願行方印決者密教家之眼肝真宗の奥蔵也　受持之人不レ離二衣裏一故絶二其流布一予幸随二下總州大田町幸華密師範上人一傳二授願行一流一并恵二借此口決一雖レ然多事故憑二武劦羽生学生尊清法師一手切二謄写己畢仰乞三尊界会照二察微志一加二被群類一速成二真正之路一而已

無上山正覚院法印尊應「字は明道」

（続）

宝永六己丑六月廿八日於武州幸手平須賀大鱗山巌聖寺近江沙門通元廿一歳書写之

祐寶雖得一流傳授盡海底恵借個糸玉未有書写之乎幸因通之学士而功成遂志願耳

夫三密瑜伽ｻﾏｰﾀ者法佛自内証十地非所窺喻然余幼而聞此説壮而耳此対而亨保丁未春攀登于醐峰恭謁祐宝ｻﾏ□渇求乎最上上味闍梨慈深而方便引入佛眼法闍授與乎……

……（略）

亨保十二丁未之夏　金剛一乗沙門苾蒭千艾（亮昌）

謹記

――以上――

大山寺略年譜（中世）

一一八四　元暦元年九月十七日　頼朝先規によって寺領をみとめる。

一一九二　建久三年　五月八日　鎌倉勝長寿院百僧供に大山寺僧三人が加えられる（後白河院追福四十九日忌）。

八月九日　頼朝夫人政子安産祈願の誦経の命あり。

一一九三　建久四年　三月四日　法皇御周関也。千僧供あり。大山寺僧参上の由。

一一九五　建久六年七月十七日　頼朝代官（斉藤左ヱ門尉基貞）を派して大山寺へ参詣せしむ。

一二八六　弘安九年三月廿八日　大山寺舞楽曼荼羅供を願行修す。

一二九五　永仁三年四月十七日　願行示寂。

一三二八　嘉暦三年　正月七日　審海弟子覚明種子曼荼羅を写す。

一三四七　貞和三年十月　前筑前守大山寺造営す。（大山寺古文書）

一三五二　観応三年　十月一日　足利尊氏、当国丸島を寄付する。

一三五三　文和二年　五月四日　尊氏天下泰平の祈祷を命ず。

六月二十三日　大山衆徒、大山寺にて凶徒退治の祈祷す。転読大般若経一部。

一三六四　貞治三年四月廿六日　天下安全の祈祷を足利基氏によってなされる。

（以下省略）

大山登山記（現在の大山）

願行上人考を書きはじめてから、ふと大山に登ってみようと急に思い立ってしまった。大山寺蔵の願行上人像をまのあたりに拝してみたかったのである。像は結局山頂を下山して、旧道の石段をくだって不動堂にたどりついた時におがんだのであった。梅雨末期のうすくらい夕刻ちかくになってしまったので、堂内も更に暗く、よく拝観することができなかったが、像は写真の示す通り、木彫で、等身よりは大きくみえた。彫りそのものは、大きな彫りで、願行という巨像にふさわしい出来ばえで、彩色もないようであった。覚園寺蔵の如く、宋風の影響もなく、安養院の像のごとくややきゃしゃなつくりではさらにない。山岳のあらあらしい大山にふさわしい堂々たる身躯、隆々としている。一寸威圧をおぼえるくらいである。名山の豪宕な祖師坐像といえる。木肌が磨れているところもあるが、全身がとのこ色をしていた。

ケーブルの終点の、下社が今の阿夫利神社で、もとの願行上人以来の大山寺の伽藍であって、本堂や庫裏、玄関がそのまま往古をものがたる寺院建築である。ただ本殿屋根だけを

社づくりにかえている。古図でみると山門もあったようだが、今はない。この下社の裏手より急峻な石段を百十余ものぼって、いよいよ山の自然石を利用した石段をふみつつ一時間半ほどかけて、えんえんと山頂に向ってのぼりかけた。何の装備もなかったので四十才の私にはかなりの難所におもわれた。以前学生とのぼった時より息苦しかった。

白装束の講社の人は殆んどなく、あっても中年以上の人が五六人のグループをつくっているのにであう。大概こういう人たちは、ビールなぞをのんでいて、赤ら顔をして杖をついて登ってくる。大抵は身が熱いので肌ぬぎになっている人もいる。現在の大山は格別信仰の山というよりは、ハイカーや家族づれ、アベックなどにまじって、学童の群れが断然多い。それだけ多彩な人種の山になっている。

とがった山頂にはあふれるほどの登山者がいて、持参の昼飯をにこやかに食べていた。どんよりと曇った空をみては、これは伝説通りに、雨に逢うのではないかと思っていたら、パラパラと山頂を辞するときに降りだしてきたが、それでもたいしたことはなくて、ことなきをえた。山頂は樹木はなく、地肌の出たところが多く、いわゆる関東ローム層という、赤つちになっている。明治十六年頃に山上は火災に逢い、それで古い建物はない。県専門委員の赤星氏のはなしでは、宝永の富士山の噴火の時の火山灰の黒い砂があるという。山頂の売店のあるところあたりを発掘調査をしたときに、平安初期と思われるかわらけがならんで出てきたり、その中央に穴が掘ってあった跡が発見された。これは修験道の行場として碑伝が立てられた跡と推定されている。その他に焼き物の硯が附近からみつけられたので、写経、埋経があったものと考えられるという。

以前登った時は五月晴の日であったので、遠く平塚方面まで一望にみわたせたが、今度は山頂をとりかこむ深い霧で一切視界はなかった。つちの肌に白い霧足が這って、ポツポツやって来そうであった。

登山に不馴れな私なぞは、現在の下社から二十八町をのぼるのは、なかなか骨が折れる。山頂までに三つの茶店をかねた休憩所のあいだには、かなりの難所がある。

真夏に登ると玉のようなしづくの汗が地べたをしめらすぐらい落ちるのでこっちも必死になる。鶯の声は頻りに聞かれる。夫婦杉から追分まではことに骨が折れる。

ここに江戸時代の古い石柱が一丈ほど高く立っていて、全山神道化した中に、宿坊宝寿院と彫ってあって、一面には石尊大権現とある。ここは宿坊宝寿院の跡地だと思うとなんとなくなつかしい気がした。大山は歴史的には高野山無量寿院に属していたのであった。

宿坊宝寿院と彫りし碑文のありここにのこりし習合のあと
石尊大権現と彫りし碑に這ふ霧たえず追分峠視界なくなる
追分の峠に在れば笹の葉を伝ひて登る霧あし疾し
頂上にたどりつきけり地肌這ふ霧つぎつぎとすぎゆく中を

やはり半分以上のぼると、漸く山気にはげまされて、ひたむきに足をうごかす以外になくなるので、身の鍛練にはなる。山は何故登るのかと聞かれれば、ただ山があるから登るのさといわれる通り、ことさらな理くつは全くないことがわかる。

茶店で休んでいると、まだ若い青年が崖道をつたっておりてくるのにであう。私の休憩している店の間を通りぬけて姿を消す。その時、「こんにちは」と店番の人に大声を出して通りすぎるので、あれ、この人たちは、知り合なのかしらと思っていた。すると、またくる人も、来る人もそういって通るものだから、近ごろの都会に住んでいる若い人たちは、すさんだ生活を送って、きわめて閉塞的な、個人主義者になりがちなのに、みずしらずの者には挨拶なぞはして通るものはない。皆自分だけのことしか考えないのが普通になっているものだからと思っていた。

実は今度の登山で一番感銘したものは、有形なものというよりは、この無形な恩恵であった。山を登る人と下る人のとりかわす「こんにちは」の声のかけあいであった。いままでにいろんな山に登ったが、このような暖い経験はなかった。汗のしづくをしぼりながら、急峻な坂につき出た不規則きわまりない石に足をほんの一瞬かけながら、どんどん登ってゆく。その時は無我夢中である。第一、こっちが登る時に下る一行に向うと、上から必ず「こんにちは」といってくれる。このとき一瞬疲れがとれる。はじめはこっちは面をくらって却ってうるさいと思う。しかし、ははァ、こうするものだなと思うと、この山頂までの一本道が実に生きた一つの山全体の活動をささえている動脈のごとく思えてくる。山上山下の

人々が一つに融和しているごとく思われた。いつしか私の心はこの山の生きた活力に完全になじんでとけこんでいった。頂上を極めて山を下る時はどうか、まだ登ってくる人をみては、少々道をあけて待つ。そして人影をみかけるだけで、「こんにちは」をしらぬ間にいっていた。登ってくる人は必ず吐息して、これにこたえる。何という山全体の交響であろうか。

それでも登って来る人がたまたま、白装束の一行であると、この「こんにちは」は、「ごくろうさん」と反応してくる。すこしなれた人や、店番の人の前を通ると、「おめでとうございます」とよろこんでくれる表情をする。山を登ることは人間同志の交響をもたらして、山の醍醐味はここにつきる。山はあるから登るというのはここに結実するのである。信仰とは遠くにあるものではなく、今人間としてこの坂道を歩いている、この時にあるのであろう。霧こめるしめった林道や、でこぼこ石の崖を上下する時こそ命があるのであろう。それを導く神仏の世界を私はすばらしく思う。山全体を本地仏の体といったのは修験道の方の考えかもしれないが、あたっているのではないか。その精神は今なお人々の心に息づいているのであると思う。

あんな不幸な戦争に国民を導いていったものは、「うちてしやまん」とか、「神の御稜威（みいず）」とかいう考えがあったからで、はたしてこれを利用した人々に罪があろう。これらがはたして本当の日本人の宗教意識であったかといいたくなる。「神の御稜威」にひれふすことは人々の本心にかなってはいないと思う。国学者の外国ぎらいによる、ナショナリズムではないか。それがどれだけファッショ的になったかは、戦争を経験した者にはわかるわけである。慈救を誓願としないでやたらに「神の御稜威」を押売りすることは、民衆が喜ぶわけはない。

大山は古く良弁の頃から、五大明王之総体也といわれている。山全体が五大明王の身体であるという。これを阿部利山というとのべ、けだし梵語ではないかと考察しているのが、「フリ」というのは、朝鮮語で「山」を意味すると最近ではいう人がいるので、帰化人の開いた山であるかもしれない。また大山を大福山とか如意山といいつたえている。山全体を烏瑟総象明王之體ともいっている。山に登ってみると、山ひだや谷がかなりふかく、幽邃であるので漢文では「前対滄溟

移経二幽林一左則有二窮谷一。右有二深洞。中央鬱とか、広沢誕漫呑二雲霧八九於胸中一。渺渺周原握二乎一挙。蕩々漢水繊二於二眼。或崑臺控二於霞際。或蓬宮飄二乎雲間一。有時玉楼金闕如レ星相羅。なぞと「大山縁起」には美文がつづくが、良弁のころは四十九院があったとつたえている。

また中興願行上人の精神を生かして、慶長十年正月には家康によって不学不律の僧は下山せしめられ、実雄法印が学頭に擢でられ、堂宇が再興されて、大山寺別当八大坊となり、慶長十五年寺領百石。十三年には碩学領五十七石の御墨印を賜うとかかれている。

実雄は八幡村成事知院の住持であった。実雄は定額僧二十五口をえらんでいる。

追　記

一応願行上人の行業をつたえるために、目下私の可能な限りの新しい資料で明らかにしてきたが、勿論高野山の伝存史料については、詳しく及ばないでいる。関東側の、目下の刊行史料として、「茨城県史料」中世編Ⅱをみることができた。

この編には、願行に関する私の懸案の事項を明かにしてくれたいくつかの点があり、有難く思っている。しかしこの史料も県下全域の諸寺にわたって明かにしたものではないのでかなり遺漏があると思われる。

一、願行の常陸での念仏結集の「阿弥陀山」について判明したことがあげられる。阿弥陀山は中世までは念仏教徒の聖地として名僧の往来があったこと。「那珂郡・久慈郡」の解説によると、阿弥陀山は久慈郡不軽山であり。常福寺（浄土宗）古文書により、了誉聖冏とかかわりがあり、聖冏は諸宗に通じ、真言を筑波郡今鹿島宝幢院宥尊に、和歌を頓阿に、神道を二荒山の権祢宜治部大輔にならった。貞和四年には了実に八才で入門し、永慶蓮勝、相模西郡桑原の良誉実慧にまなび、応永二十七年（一四二〇）に寂した。一時「佐竹義秀の乱」に阿弥陀山にのがれるという。

東茨城郡の解説によれば、宥尊の師上宥（宥成）は下総の生尾の出で、佐久間方の宥生舜の弟子であり、浄瑠璃寺に入る。ここで雪下（鎌倉）の隆城寺（印融著「西院流血脈」によれる。）は貞雅（極楽寺山中西方寺に永和二年二月十日、八十一才入寂）の住坊であるが、ここで聖宰に一流伝授を受く。聖宰は理智光院の長老である（古文書あり）。上宥はさ

らに応安二年（正平二四年）（一三六九）に覚園寺で同じく聖宰から伝授をえている。小松寺の宥尊は応永三三年（一四一六）、鎌倉御所足利持氏にまねかれて鎌倉に来ている。宥尊は聖冏の叔父にあたり、聖冏は浄土宗鎮西義を大成した人である。また真言律にも明るかった。ここで阿弥陀山と願行と聖冏、おなじく願行流の末流である佐久間方の宥尊と聖冏と鎌倉との関係は特におもしろい。宥尊には「十余人将弟子、興教学」といわれた。この流は戦国期まで関東一円に勢力を保った。このことは小松寺、六地蔵寺、浄瑠璃寺の古文書をみるとわかる。六地蔵寺文書に、

三宝院流之内四派
意教、道教、憲深、光宝
意教ノ流之内四派
証道、願教、慈猛、妙性
右之内、願教「行」意教
高野方を山方ト云
宥尊方ヲ佐久間方ト云
憲静鎌倉大楽寺院住

とある。この頃は願行は大楽寺の住持といわれていたのである。

六地蔵寺文書には、開山宥覚は小松寺開山宥尊の弟子で、宥覚の次代は宥実である。その弟子恵範は文明から天文七年にかけて大いに活躍し、時あたかも南関東の印融と相似ている。その他小松寺文書八八号にはくわしい「願行流血脈」があることを報告しておく。

（昭和五十二年二月七日）